



今年度のFD・SD研修会を振り返って

学長 矢野 泉

昨年ある会議である大学の学長が「教職協働」、本学でいうところの「教職協創」という言葉への違和感について言及された。高等学校までは「職員室」が先生の控室を意味するように職員と先生は不可分なものであるが、大学では先生は教員、職員は部局職員を示す言葉となっているというその学長の話を聞いて以来、「大学職員とは何か」についていろいろと考えを巡らせている。まだ明確な解答を私自身見つけることができていないが、2022年の大学設置基準等改正において教員組織・事務組織等規定が再整理されたこともあり、本学もこれから具体的な検討が求められている。しかし、まずは教員も部局職員も同じ「大学構成員」という意識で、各々の役割を果たしながら広島修道大学という大きな船を動かしていくことができたらいいなと思っている。結局目的とするところは「教職協創」と同じであるが、以下、これまで「教職員」としてきた部分をこの巻頭言ではあえて「本学構成員」と置き換えて筆を進める。

FD・SD研修会は本学構成員が共に参加する研修である。本学第2期中期事業計画（2011～2014年度）の中で本格的に取り組み始め、2011年度から実施されている修道力フォーラムに代表されるように大学を取り巻く現状や課題を共有する機会として位置づけられている。2022年度も同様の目的の下、2回のFD・SD研修会を実施した。今年度は原則対面授業となり、モノやヒトが物理的にキャンパス内で動くことで急に忙しくなったと感じられた方も多だろう。それに加え、新学科設置準備、カリキュラム改定、認証評価改善報告書提出、新教学システム導入準備等、大学にとって大きな仕事をそれぞれの整合性をとりながら同時期に進める必要があったため、多くの人に大きな負担をかけたこと認識している。その負担、せめて前向きな気持ちになり心

の負担を軽減してもらえないだろうかという思いで、なぜ今このように物事を進めなければならないかを共有する機会としてFD・SD研修を位置づけさせていただいた。

第1回FD・SD研修会（修道力フォーラム）の全体テーマ「教育の質保証」は、大学の存在意義の根幹に関わるものであり、学生の成長にとって良い教育環境を作るということがその本質である。事後アンケートを拝見すると、初めてそういう視点を知ったという声もあった。特に佐渡先生、井寄先生に報告いただいた実際の学部の取り組みは、学生のために学部としてどのようによい教育を行っていくかという教員の思いや作業内容を広く知っていただく機会になったのではないかと考える。

第2回FD・SD研修会では「大学仕事のDX」をテーマに、情報学分野がご専門の広島工業大学長坂康史学長に講演いただき、言葉自体は既によく知られているが中身については曖昧な私たちのDXについての理解を深める機会になった。デジタイゼーション・デジタルイゼーション・DXの違いや各段階に必要なことを示していただくことで、本学の現在位置や今後の課題について認識できたのではないだろうか。その上で本学の事務システム導入について総務課から具体的な報告をいただいた。導入に至るまでの経緯やメリット、導入後の課題についての実際を共有するよい機会となったのではないかと考える。

いずれのテーマも、日々検証や改善を続けていかなければいけないものである。お忙しい中ご報告いただいた皆様、また事後アンケートにおいて感想に加え様々なご提案をいただいた本学構成員の皆様へ感謝をお伝えするとともに、今後もよりよい教育環境、職場環境構築のため本学構成員が広く参画できる場を考えていきたい。

2022年度 第1回 FD・SD 研修会（修道力フォーラム）

テーマ「教育の質保証」

学修成果の可視化と教育の質保証

副学長・教学センター長 羅 星 仁
(コーディネーター)

2022年度修道力フォーラムは、「教育の質保証」というテーマで開催されました。第2部のパネルディスカッションでは、本学の国際コミュニティ学部と経済科学部における「学修成果の可視化」に関する事例報告、その後、基調講演者の中村浩二氏を加えて教育の質保証の目的である「学習者本位の教育」と教育の質保証の手段である「学修成果の可視化」に関する討論を行いました。

パネルディスカッションを通じて、学修成果の可視化の目的が、一人ひとりの学生が自らの学修成果を把握でき、自分が大学で学んだものをエビデンスとともに他者

に説明できるようになることだとの共通認識ができたことは大きな意義があると思います。また、パネルディスカッションを通じて学修成果の可視化のためのアセスメントプランが大学自ら現状の教育課程を把握し改善する際に重要な役割を果たすことも確認されました。

第2部の最後に行われたフロアーとパネリスト間の質疑応答の時間も非常に有益でありました。大学としても既存の手法やデータを効率的に活用しながら、学修成果の可視化、またはアセスメントプランを運用しながら、教育の質向上のために今後とも力を入れていきます。

学修成果の可視化と教育の質保証—経済科学部の取組

経済科学部教務主任 井 寄 幸 平
(報告者)

2022年度の修道力フォーラムにおいて、「学修成果の可視化と教育の質保証—経済科学部の取組」として事例報告をさせていただきました。報告にあたってアセスメントの状況を改めて確認しましたが、率直なところ「思っていたよりも多くの取組が継続的になされている」という印象でした。入試やプレイスメントテストの分析、学修や就職に関する各種指標の検討などは、おそらくどの大学、学部でも実施されているものと思います。学部独自の取組として1年生の受講状況調査や単位僅少者指導、内部質保証状況などもご報告しましたが、こちらも際立っ

て珍しいものではありません。しかしながら、それらの指標を「誰に向けて」、「どのような方向性で」活用するのかについては未だ試行錯誤の途上にあるとも感じました。PDCAサイクルでいう最後の「A」の部分と、そこから次のサイクルへと繋いでいく方法の確立が、今後の課題になることでしょう。現在、修道大学ではアセスメントプランの策定が進んでいますが、単純に各種のデータを集めるだけでなく、それぞれを連携させて一貫した可視化、評価を行う体制の構築が必要であり、今回の報告がその一助となれば幸いです。

学修成果の可視化にむけた国際コミュニティ学部の取り組み

国際コミュニティ学部長 佐 渡 紀 子
(報告者)

国際コミュニティ学部では、カリキュラム改革ワーキンググループ、学部教務委員会、学部教授会、学部FD推進委員会の場で検討を重ねながら、2021年度に集中的に、学修成果の可視化のための仕組みづくりに取り組みました。フォーラムではその概要を報告しました。

まず取り組んだのはカリキュラム分析のための「基盤データ」の構築です。学部開講科目それぞれについて、ディプロマ・ポリシーに示す5つの力をどの程度伸ばすことができる設計なのかを数値化しました。この数値は学部カリキュラムの検証に活用するとともに、将来的には、新教学システムを通じて、学生自身が自らの学びを設計・検証するために活用することを意図します。次に、

卒業年次生の評価枠組みを導入しました。学びの集大成としての成果物（ゼミ論文や政策提言など）への評価を通じて、学生自らが卒業時の状況を把握することを可能とし、学部としては学生の学修成果を把握することで、カリキュラムや授業の改善につなげることを目指しています。2022年度の卒業生について、整えた学科別のルーブリック表を用いた評価を試行します。

基盤データを用いたカリキュラムの試行的な分析の経験や卒業年次生に対する評価の試行結果、加えて、2022年3月に実施した卒業時アンケートの結果も踏まえ、導入した仕組みを今後改善し、より良い学修成果の把握・評価方法を作り上げていきます。

2022年度 第2回 FD・SD 研修会

テーマ「大学仕事のDX」

文書回覧の電子化 desknet's NEO の機能を活用

総務部総務課 岡田 武士
(報告者)

第2回 FD・SD 研修会での報告において、本学に来輸した文書回覧の電子化について報告する機会を得た。

報告では、まず従来の紙媒体における回覧に至るまでの文書処理・業務フローについて、次に電子化後の文書処理・業務フローについて説明した。

近年、本学に来輸する文書は、従来までと異なりほぼすべての文書がメール配信で来輸してくる。従来のように紙媒体で来輸する文書は、例えば非常勤講師や学外委員の委嘱依頼など一部に限られるのが現状である。紙媒体での文書回覧を行っていた2021年度までは、メールで来輸した文書をプリントアウトし、小さなハンコで回覧経路の押印欄を作成し回覧していた。さらに、関係部署へは処理した文書をコピーして配布することにより情報共有していた。

そもそも文書業務のポイントは、来輸した文書について「来輸したことを記録すること」と「関係者・関係部

署等へ情報共有すること」であると理解している。研修会では、押印削減の検討等を契機に年間1,300件を超える来輸文書に対し、既存ツールである desknet's の回覧機能を活用し電子媒体の来輸文書データを電子データのまま処理することで、業務フローの簡略化等による効率化と情報共有のスピードUPを図った取り組みとして報告を行った。

ご存じのとおり、電子化すればすべてが効率化されるわけではない。従来の紙媒体の処理をそのままに電子化による処理を付加したり、紙媒体での処理を併用したりすると、効率化どころか業務量の倍増や煩雑化を招いてしまうこともある。そのような運用にならないよう注意しつつ、今後も電子化等による効率化や利用者の利便性向上につながる案件がないか、引き続き日々の業務の効率的な運用について検討していきたい。

旅費システム導入

総務部総務課 萩藤 宜千
(報告者)

旅費システム導入後の出張申請はいかがでしょうか。直感的操作ができず、マニュアルを読まないで入力できない等のお声も届いています。しかしながら以前の出張申請と比べ、出張者の押印が不要になったり、旅程を確認できたり、先生方は総務課への来課が不要、職員の皆さんは、財務システムと連動し、出金伝票の起票が不要になる等、利便性が向上しているのではないのでしょうか。

第2回 FD・SD 研修会において、今年度4月から稼働した旅費システムの導入経緯や簡略化された手続きについて説明させていただきました。お話ししましたとおり、総務課では、コロナ禍以前の年間約2,300件を数える出張申請に関する業務を省力化すると同時に、出張者の利便性向上のため、本学の手続きに合致した旅費システムを導入することが急務でした。しかし、旧学園旅費規程に則った運用ルールに縛られるあまり導入が遅々として進まないという状況にありました。そこで、これまでの発

想を転換させ、旅費規程そのものに旅費の計算をシステムによると規定し、根拠づけるよう改正することで導入を強く推進しました。これによりシステム導入への突破口を開いたのです。

今年度より出張が本格的に再開され、現在約1,100件を数えるまでになっています。導入直後ははじめてのことで戸惑いもあり、操作方法について多くの問い合わせをいただいておりますが、現在はほとんどなく、皆様は操作に習熟してくださったという印象もっています。総務課では皆様からいただいた不具合報告や不便な点等はすぐに導入業者に連絡して解決を図るなど、利便性向上にむけた努力を絶えず行っております。旅費システムはまだまだ生まれだての状態、いわゆるデジタル化の段階ですが、これがゆくゆくはデジタルトランスフォーメーションにつながっていくよう、どうか育てていく目で見てください、今後もご意見を頂ければと思います。

各種研修会参加報告

私大連「FD 推進ワークショップ（新任専任教員向け）」参加報告

人文学部 石田 崇

本ワークショップは、理想の授業に向けた授業づくりについて、他大学・他分野の先生方との議論や活動を通して、互いの授業を改善していくことを目的としたものである。

所属したグループでは、まず、メンバーがそれぞれの専門科目に関する模擬授業を行った。その後の議論では、グループリーダーとして、「理想の授業とはなにか」というテーマについて意見をまとめ、各グループの代表者による最終発表の場で発表を行った。

具体的には、各自が想定するような理想の授業を実現するためには限りがあるため、まずは、授業づくりにおける「足し算と引き算のバランス」を考えるべきであるという結論に至った。例えば、授業内で学生が質問や意見を発信できるといったアクティブラーニングの活動を足し算的に捉え、教員による資料提供や課題提示を引き算的に考えるのである。

私大連「FD 推進ワークショップ（新任専任教員向け）」参加報告

法学部 前田 星

去る2022年8月5日、FD 推進ワークショップに参加した。「オンラインでの授業の在り方」という時宜にかなったテーマに、着任したばかりの私は関心を抱いた。参加者は分野も経歴も多種多様であったが、一様にオンラインでの授業の在り方に苦慮していた。いかにして学生を授業に引きつけ参加させるか、という課題そのものは、オンラインでも対面でも変わらず教員の悩みであるが、対面授業で行えることとオンライン授業で行えることには差異がある。本ワークショップではグループに分かれた各参加者が、如上の課題に応えるべく、各々で創意工夫をこらした模擬授業を展開した。とりわけ、授業にライブ感を生じさせる手法については、学ぶことも多かった。実際にワークショップでの気づきを授業に反映させたところ学生の反応も良かった。この経験を糧に、今後も授業をアップデートしていきたい。

私大連「FD 推進ワークショップ（新任専任教員向け）」参加報告

人間環境学部 岡西 政典

本年度のFD 推進ワークショップはオンラインで、一日のみの開催ということであったが、その分、他学の教員と密な情報交換が行えたと思う。私の模擬授業では、私の癖である「少し早口になるため、もう少しゆっくりと話しても良い」というコメントをいただけたため、改めて自分の改善すべき点として認識することができた。

また他の先生方の模擬授業も参考になった。例えば受講生に「自分が最近買ったお気に入りのものを紹介する」ということを促す模擬授業は、自身の講義にも活かすことができた。また私の専門が基礎科学に近く、自身の講義で自分たちの生活との関連を示すことが希薄になりがちであったということも自覚できた。このような気づきを今後の講義に盛り込むことで、一方向ではなく、学生とのコミュニケーションがとれるような教育を行ってゆきたい。

教育力アップセミナー参加報告

教学センター教務第2課 有馬 有佳里

2022年8月26日（金）に行われた第12回教育力アップセミナーに参加した。本セミナーは、採用1年目の教員と2～4年目の職員を対象とした研修であり、大学における課題を教職員で互いに共有しながら改善のための方法を探ることを通して、本学の教育力を組織的に高めることを目的としている。

セミナーでは、IRについてワークショップ形式で学びを深めた。グループごとに「広島修道大学の現況」などから抜粋したデータが示され、そこから読み取れる課題の検討、改善策の提案を行った。

立場や部局の異なるメンバーとの意見交換は、着眼点や提案がバリエーションに富んでおり、非常に興味深く、活発な議論をすることができた。半日という短い時間ではあったが多くの学びが凝縮されており、今後それぞれの立場からどのようにIRを活かしていけるかを考える良い機会となった。

